若狭おばま ゆかりの偉人

探訪マップ 幕末・明治編

ごあいさつ

若狭は、古代から海産物や塩などの豊富な食材を都に送り、朝廷の食を支えた「御食国」のひとつであり、現代まで京の食文化を支えてきました。「鯖街道」と呼ばれる若狭と都をつなぐ街道群は、食材だけでなく、様々な物資や人、文化を運ぶ交流の道であり、大陸からつながる海の道と都へつながる陸の道の最大の結節点であった小浜には、数多くの往来文化遺産群とともに、古来より様々な偉人が名を遺しています。

このたび、平成30年(2018)が明治元年(1868)から150年の節目となることを記念して、ゆかりの地に設置された幕末明治の偉人の功績を記す説明板を修理し、探訪マップを作成することとなりました。

このマップを手に小浜を探訪する歴史の旅に出かけていただけましたら幸いです。

小浜市教育委員会文化課
2019年3月

江戸時代以降、小浜では好学な藩主の影響のもと学問的土壌の豊かな土地柄で、各分野で多くの偉人を輩出してきました。近代医学に貢献した杉田玄白・中川淳庵や、国語文法の基礎を固めた東條義門、幕末の志士　梅田雲浜など、近代日本の創生に関わった幕末明治の小浜ゆかりの偉人達を紹介します。

看板2　軍人　佐久間　勉

1879年(明治12)に生まれた佐久間勉は、1909年(明治42)、海軍の第六号潜水艦艇長となりますが、翌年4月15日、広島湾における潜航訓練中に、乗組員13名とともに30歳で殉職しました。死の直前まで書かれた艇長の遺書には、事故の様子が克明に記されるとともに、父への伝言、お世話になった人たちへの感謝、部下の遺族に対する配慮が記されており、その冷静沈着にして最期まで思いやりを忘れない姿は当時世界中から賞賛されました。

看板3　医師　中川 淳庵

1739年(元文4)小浜藩医中川仙安の子として江戸に生まれた淳庵は、1770年(明和7)に小浜藩の奥医師となりました。幼少の頃より薬学や博物学といった本草学に興味を示し、その分野では、ヨーロッパにもその名が知られる程でした。また、『解体新書』刊行の発起人の一人で、前野良沢、杉田玄白とともに人体腑分けに立ち会った淳庵は、人体の中がオランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』の解剖図とあまりにもよく似ていることに驚き啓発され、早速その翌日から翻訳を開始し、1774年(安永3)『解体新書』として発刊しました。1785年(天明5)、48歳で亡くなりました。

看板5　俳人　尾崎 放哉

1885年(明治18)鳥取県に生まれた放哉は、1909年(明治42)東京大学を卒業後、生命保険会社へ就職しましたが、酒に溺れて退職に追い込まれました。以後、漂白の旅を続け、1923年(大正12)京都の一灯園で托鉢生活に入りました。1925年(大正14)5月、常高寺の寺男として同年7月まで小浜で過ごし多くの俳句を残しました。その後、京都や須磨を転々とする間、膨大な俳句を詠み才能を見事に開花させ、同年8月に小豆島の西光寺南郷庵(香川県)に住み、三千句に近い俳句を作り、翌年4月孤独な42歳の生涯を終えました。

看板6　川柳家　西田 当百

1871年(明治4)、小浜今宮に生まれた嘉吉は、26歳で大阪堺の染物業西田家の養子となり、大阪毎日新聞社に勤めながら、35歳から川柳を始め当百を名乗りました。1887年(明治20)、東京で起こった新川柳運動に対して、関西でその運動の中心となり、1909年(明治42)には関西川柳社を創立し、1913年(大正2)には「番傘川柳社」に改名、柳紙『番傘』を編集発行し、柳檀の大御所と呼ばれました。川柳の雑誌『番傘』は、いまも続刊されています。1944年(昭和19)6月30日、73歳で亡くなりました。

看板7　国語学者　東條 義門

1786年(天明6)妙玄寺の5世伝瑞の末子として生まれた義門は、1799年(寛政11)願蔵寺の養子になり、義父の跡を受けて住職となりました。が、1807年(文化4)住職である兄の実伝が亡くなったため、妙玄寺の住職となりました。本居宣長や春庭の国語研究に関心をもち、詳細な文法の解明に努めました。著書『男信』では、漢字音の韻尾にn音・m音の区別があることを考証し、『山口栞』では動詞・形容詞・助動詞の活用語に大きな業績を残し、本居宣長らの研究を継承・発展させ、江戸時代随一の国語学者と言われました。1843年(天宝14)に亡くなりました。

看板9　歌人　山川 登美子

1879年(明治12)、遠敷郡雲浜村上竹原で生まれた登美子は、大阪ミッションスクール梅花女学校の研究生であった22歳のときに創刊の『明星』に心惹かれて社友となりました。『明星』に歌を寄せる女性たちのなかで、登美子(白百合)、鳳晶子(白萩・のちの与謝野晶子)、増田雅子(白梅)の3人は特に注目されましたが、1901年(明治34)親が決めた山川駐七郎と結婚。歌壇から距離を置くこととなります。しかし、夫が結核に冒され、2年足らずで他界。その後再び歌の世界へ戻り、晶子、雅子とともに『恋衣』を発刊するなど活躍しますが、夫から感染した呼吸器疾患のため、1909年(明治42)4月15日、29歳で亡くなりました。

看板10　志士　梅田 雲浜

幕末の志士として活躍した梅田雲浜は、1815年(文化12)に小浜藩士矢部家の次男として生まれ、のち祖父の生家である梅田姓を名乗り、山崎闇斎が提唱した朱子学(実践道徳の教え)の一つ崎門学を学び、日本が対外関係で緊迫化するなか海防策に関する意見書を藩主に提出したことで、1852年(嘉永5)に浪人となります。生活困難ながら尊皇攘夷を唱え、志士の指導者となった雲浜は、青蓮院宮へ意見書を提出し、戊午の密勅にも関係して安政の大獄で捕まえられ、1859年(安政6)45歳で獄死しました。

看板11　政治家　山口 嘉七

1857年(安政4)、小浜藩士山口甚大夫の3男として上竹原に生まれ、苦学して法律学を修め京都・大津で弁護士を開業後、郷里に帰り政治家をめざしました。1897年(明治30)福井県会議員に初当選し、私立稚桜女学校(若狭高校前身のひとつ)を創立するなど教育機関の拡充に尽力しました。ついで1915年(大正4)衆議院議員当選後、敦鶴鉄道促成建議案を提出し、1922年(大正11)に小浜線の全線開通を実現させ、1925年(大正14)には北川・南川の改修を地方河川としては異例の国直轄工事として実現しました(1941年(昭和16)完成)。1932年(昭和7)に75歳で亡くなりました。

看板12　教授　小野鶴山・西依墨山

第7代小浜藩主酒井忠用は儒学に親しみ、1743年(寛保3)に京都の望楠軒の講主若林強斎の門人の小野鶴山を招いて藩士の教育にあたらせました。鶴山が70歳で死去した後、小浜藩は、1770年(明和7)に望楠軒の講主西依成斎の養子墨山を藩の儒者として召し抱えました。西依墨山を教授として、1774年(安永3)に藩校順造館が開校しました。墨山は、山崎闇斎が提唱した朱子学(実践道徳の教え)の一つ崎門学を教え、1800年(寛政12)75歳で死去しました。墨山以後、小浜は崎門学派の一拠点となりました。幕末の志士梅田雲浜も順造館で崎門学を学び、のちの尊皇攘夷運動につながりました。

看板17　医師　杉田 玄白

1733年(享保18)、小浜藩医杉田甫仙の子として江戸で生まれました。8歳のとき父の転勤に従って小浜へ引越し、13歳まで小浜で過ごしました。1752年(宝暦2)小浜藩医となり、1769年(明和6)に家督を相続しました。オランダ外科に高い関心を持っていた玄白は、1771年(明和8)、前野良沢、中川淳庵とともに江戸小塚原刑場で行われた人体腑分けに立ち会い、オランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』に描かれている解剖図の正確さに驚き感動し翻訳に取りかかり、1774年(安永3)に世に知られた『解体新書』を発刊しました。1817年(文化14)、江戸において84歳で亡くなりました。

看板21　考古学者　上田 三平

1881年(明治14)羽賀で生まれた三平は、1914年(大正3)県の委嘱によって内藤湖南博士の県内史跡調査に随行。1917年(大正6)には、福井県史跡勝地常任委員を命ぜられ、『越前及若狭地方の史蹟』を刊行しました。1921年(大正10)には石川県、1924年(大正13)には奈良県の史跡調査に従事し、平城宮址の発掘調査や法隆寺の出土瓦の研究などを行いました。1927年(昭和2)からは内務省の史蹟調査の嘱託員をされ、『日本薬園史の研究』を刊行、戦前の登呂遺跡発掘も指揮しました。小浜市内に国史跡の指定が多いのは氏の功績であります。1950(昭和25)69歳で横浜において亡くなりました。

看板22　僧侶　原田 祖岳

1871年(明治4)小浜藩士河津政次の次男として小浜に生まれた証司は、1877年(明治10)伏原仏国寺の原田祖道師の養子になり、出家し、祖岳と名付けられました。1898年(明治31)曹洞宗大学林(駒沢大学)に学び、1909年(明治42)母校の駒沢大学教授に迎えられました。1921年(大正10)には発心寺の住職に迎えられ、その徳を慕って全国から多くの修行僧が集まり一大修行道場となりました。隠居後は全国へ講演に出向き禅の普及に努められ、1961年(昭和36)90歳で亡くなりました。

看板23　国学者　伴 信友

1773年(安永2)、小浜藩士山岸維智・母さよの4男として生まれた信友は、16歳にして藩士伴信富の養子となり藩主酒井忠進の子守役などを努めました。しかし、元来勉学の士であった信友は、29歳のとき国学者の本居宣長先生の学問に傾注し、宣長の養子本居大平の計らいで宣長没後の門人となりました。実証学者(観察・実験より解明する学者)として名声を得た信友は、平田篤胤・橘守部・香川景樹と並び、「天保国学四大家」と呼ばれました。晩年、小浜藩の国学の基礎を築き、『若狭旧事考』などの郷土史を編纂し、若狭の歴史と文化の発展に貢献されました。

看板28　芸妓　幾松

木戸孝允の夫人木戸松子は、1843年(天保14)、小浜の木崎市兵衛と三方郡神子浦の医師細川益庵の娘すみとの間に生まれ、計と名付けられました。父が京都に出たためのちに家族も上洛し、父の死によって、9歳の時から舞妓となって14歳で幾松の芸名を名乗ったと伝わります。1861年(文久元)、尊王攘夷運動に参加していた桂小五郎に出会いそれ以後、新撰組の襲撃から小五郎の身を守るなど、献身的に尽くしたとされます。明治維新後、山口藩士岡部富太郎の養女となり、松子と改名して、木戸夫人となり東京で生活をしました。1877年(明治10)に孝允が死去すると、京都木屋町別邸に帰り、髪を下ろして翠香院と号し、1886年(明治19)に43歳で亡くなりました。

【その他の小浜ゆかりの歴史人】

看板 1　世阿弥
能楽の大成者・佐渡流刑の際の船出の地が小浜とされる

看板 4　常高院
浅井三姉妹の次女・初代藩主京極高次の妻であり、常高寺を建立した

看板13　酒井忠勝
初代酒井小浜藩主・小浜城を完成させた

看板14　綱女
我が身を犠牲にして狂犬から奉公先の幼児を守った少女

看板15　亜烈進卿
文献史上、日本に初めて象をもたらした南蛮人

看板16　二条院讃岐
百人一首の歌人・矢代浦にある沖の石を詠んだとされる歌がある

看板18　英甫永雄
近世狂歌の祖と謳われる京都五山の学僧・若狭守護武田元光の孫

看板19　面山和尚
曹洞宗中興の祖と呼ばれる、空印寺の14世住職

看板20　良弁和尚
東大寺の初代別当・伝説では小浜から鷲にさらわれ、奈良で育った

看板24　木下勝俊(木下長嘯子)
隠棲後、茶をたしなみ近世和歌の大家と呼ばれた若狭守護

看板25　堀田正信
幕府老中堀田正盛の子・所領没収後、小浜藩の須縄村に幽閉された

看板26　坂上田村麻呂
平安時代の征夷大将軍・蝦夷征伐の霊を慰めるため明通寺を創建した

看板27　八百比丘尼
人魚の肉を食べた伝説の女性・空印寺の入定洞で消息を絶ったと伝わる